イズミノオト

仙台銀行ホール イズミティ21 コンサートシリーズ
イズミノオト 第5回 スメタナ・ドヴォルザーク・ヤナーチェク 故郷ノ回顧録（メモワール）

ヴァイオリン
会田莉凡

ヴァイオリン
大江馨

ヴィオラ
安達真理

チェロ・コーディネーター
吉岡知広

2021
7／3（土）

［開　演］午後3時（開場 午後2時30分）
［会　場］仙台銀行ホール イズミティ21 小ホール
（仙台市営地下鉄泉中央駅北3出口すぐ）
［入場料］全席指定 3，000円
（市民文化事業団友の会料金2，700円）
※未就学児はご入場いただけません
2021年6月4日（金）一般発売

Bedřich Smetana
Antonín Dvořák
Leoš Janáček

［プレイガイド］仙台銀行ホール イズミティ21、日立システムズホール仙台臨時事務所、藤崎、仙台三越、ローソンチケット（Lコード：21843）
［チケットに関するお問い合わせ］仙台市市民文化事業団 総務課　TEL：022-727-1875（平日9：30 ～ 17：00）
［公演に関するお問い合わせ］仙台銀行ホール イズミティ21　TEL：022-375-3101（9：30 ～ 19：30休館日を除く）
［主催］公益財団法人仙台市市民文化事業団、KHB東日本放送　［企画制作］仙台銀行ホール イズミティ21、HAL PLANNING
［協力］日本音楽財団（日本財団助成事業）　［協賛］仙台銀行

【プログラム】

ドヴォルザーク
弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 作品96 B．179「アメリカ」

ヤナーチェク
弦楽四重奏曲 第2番「内緒の手紙」

スメタナ
弦楽四重奏曲 第1番 ホ短調「わが生涯より」

新型コロナウイルス感染予防のため、ご協力をお願いいたします。

- 37.5度以上の発熱や咳、咽頭痛、倦怠感、味覚・嗅覚の喪失等の症状がある方は、ご来場をお控えください。
- ご来場の際は必ずマスクを着用いただき、こまめな手洗い、手指消毒などの感染予防にご協力ください。
- チケットの半券にお客様の氏名・電話番号をご記入ください。万が一、会場で感染者が出た場合は、連絡先を保健所等の公的機関へ提供させていただきます。あらかじめご了承ください。
- 新型コロナウイルス接触確認アプリのインストールを推奨します。
- お客様同士の距離の確保をお願いいたします。
- 時間に余裕をもってお越しください。
- 会場では大声での発声はご遠慮ください。
- 退場は順番にご案内いたします。
- 出演者・関係者へのプレゼントおよび、お客様のお荷物のお預かりはできません。
- 出演者・関係者への面会はお断りします。

会員募集中！
仙台銀行ホール イズミティ21コンサートシリーズ
Facebook公式ファンクラブ イズミノオトモダチ
コンサートに関する情報など発信していきます。ぜひ"いいね！"してください。
URL：https://www.facebook.com/izuminootomodachi/

ヴァイオリン
大江 馨

©Shigeto Imura

仙台市出身。桐朋学園大学ソリストディプロマコース在学中に慶應義塾大学法学部にて学び、卒業後、ドイツクロンベルクアカデミーを修了。2019年レオポルトモーツァルト国際ヴァイオリンコンクール第3位、2013年日本音楽コンクール第1位ほか国内外にて数々の受賞これまでに尾高忠明、山田和樹、川瀬賢太郎各氏等の指揮でNHK交響楽団ほか数多くのオーケストラと共演を重ねる。使用楽器は、文京楽器協力のもとBeare International Societyより貸与されている。B.Vuillaume。

ヴァイオリン
会田 莉凡

©Rei Uesugi

桐朋学園大学ソリストディプロマコース在学中に第81回日本音楽コンクール第1位、併せて4つの副賞を受賞。第6回ルーマニア国際音楽コンクール、秋吉台音楽コンクールなどで優勝。ソリストとして日本各地のオーケストラと共演するほか、宮崎国際音楽祭、サイトウキネン・オーケストラに毎年参加。リトン晴れた海のオーケストラメンバー。岩澤麻子、鷲見健彰、徳永二男の各氏に師事。2020年4月より京都市交響楽団特別客演コンサートマスター。

チェロ・コーディネーター
吉岡 知広

©Masafumi Tamura

仙台市泉区出身。桐朋女子高校音楽科（共学）を経て桐朋学園大学音楽部門を卒業。その後、ライプツィヒ音楽演劇大学大学院に在学するとともに、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団と学生契約をし、在籍。卒業後は同管弦楽団アカデミーに在籍。第9回ビバホールチェロコンクール第4位入賞。チェロを金木博幸、青木十良、藤原真理、毛利伯郎、C.ギガの各氏に、室内楽を今井信子氏、東京クァルテットに師事。現在、仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者として在籍。

ヴィオラ
安達 真理

東京を拠点にソリスト、室内楽奏者として幅広く活動するなか、今年度より日本フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ客演首席奏者に就任。今年8月、T-TOC RECORDSよりバッハの無伴奏作品を収録したアルバムリリースも控えている。2013年よりインスブルック交響楽団にて副首席奏者を2年間務め、2016年以降バーヴォ・ヤルヴィ氏率いるエストニア・フェスティバル管弦楽団にも参加している。
オフィシャルサイト
https://www.mariadachi.com/

仙台銀行は「コンサートシリーズ イズミノオト」に協賛しています。

音と心のリアリズム
～チェコで生まれた3つの弦楽四重奏曲～

文・吉川和夫（作曲家　聖和学園短期大学学長）

プラハ市内を流れるヴルタヴァ川

文学に「私小説（ワタクシショウセツ）」と呼ばれるものがあります。作者が、自分自身や家族など身近な人をモデルとして、実際に起こった事象や真情などをありのままに描くもので、田山花袋や志賀直哉のほか、太宰治の一部の作品にも指摘されます。しかし、「私小説」はあっても「この音楽作品は『私（ワタクシ）音楽」である」と呼ばれることはありません。音楽はことばに比べて抽象的ですから、音そのものによって描くものは、文学の「私小説」がめざすリアリズムとは違っているからでしょうか。

ロマン派の音楽作品には、「私小説＝私音楽」と呼んで差し支えない作品が多いように思います。恋や妄想、歓喜や悲嘆など、作曲者自身の精神的な実体験が発端になりますが、単なる気分や感情だけで音楽作品を成立させることはできませんから、一個人の一時的な感情を超えた普遍的な人間精神の在りようにまで浄化しおおせた作品が、名曲として愛され続けることになるでしょう。

少し話が逸れますが、「標題音楽」と呼ばれるものがあります。例えば、ベートーヴェンの交響曲第6番「田園」には、各楽章に「田舎に着いた時の愉快な気分」「小川のほとりの情景」など、曲の理解を促すようなタイトルが付けられています。あるいは、交響詩。作曲者が題材とした伝説や自然、物語などが、タイトルと、「作曲者のことば」によって提示され、音とことばによって、水の源流が大河になっていく様子や、伝説のいたずら者の所業と運命などが聴き手に受容されるのです。ただし、作曲のエピソードを知らないと作品を理解できないということはありません。音楽以外の文脈を排除して、音そのものだけと向き合おうとするのも構わないことです。

今回の公演の「故郷ノ回顧録（メモワール）」という副題は、いみじくも、この3作品の「私小説＝私音楽」的性格を示しているように思います。いまここで「私小説＝私音楽」と呼ぼうとしているのは、作曲者自身の体験や内面を色濃く映しだす作品です。時に荒唐無稽な絵空事が広がるのを楽しむ「ロマン主義」に対して、自然主義的なリアリズムをめざす「私小説」は、本来アンチの関係に立つものですが、音楽の場合は、「私小説＝私音楽」と「ロマン主義」は区別されません。「私小説＝私音楽」では、作曲者の内面を共有するために、標題音楽以上に具体的なタイトル、「作曲者のことば」を介在させる必要があるでしょう。

今回のプログラムを作曲された順に、少し詳しく見ていきましょう。

19世紀初頭のボヘミアは、政治的にも宗教的にもオーストリア帝国の支配下にありました。のちにチェコの国民的作曲家となるスメタナは、1824年ボヘミアの小都市リトミシュルに生まれます。ビール醸造技師であり、アマチュアながら熟心なヴァイオリニストでもあった父の影響もあり、幼少期から音楽の才能を現します。家庭でも学校でもドイツ語を話し、30歳を過ぎるまでチェコ語の手紙を書いたことがなかったと言われますが、1848年のプラハ革命を直接のきっかけとして、スメタナは愛国心をかきたてられ、ボヘミア民族のアイデンティティを追求する作曲家となっていきます。リストやヴァーグナーからの影響を非難されながらも、1879年には連作交響詩「わが祖国」を完成し、翌年初演されました。6曲からなるこの不朽の名作の第2曲は、特に有名な「ヴルタヴァ（モルダウ）」です。しかし、実はこの連作交響詩の第1曲が完成する前からスメタナの健康は悪化し、1877年7月には両耳の聴力が失われました。

《弦楽四重奏曲　第1番「わが生涯より」》は、1876年に「わが祖国」と並行して作曲されました。スメタナ自身、音によって、自らの生涯を描く」と述べ、各楽章に添えたことばが物語るように、この作品はスメタナ自身の音楽による自叙伝です。第4楽章の後半には、耳鳴りを現すかのような衝撃的な高音が鳴り響きます。最晩年は鬱発作を起こすなど、平穏にはほど遠い日々でしたが、スメタナは自らのアイデンティティを書き遺すために、「私小説＝私音楽」の意識でこの作品をまとめたのでした。不屈の意志に貫かれた傑作です。

ドヴォルザークは、1841年プラハ近郊の村、ネラホゼヴェスで生まれました。村の音楽教師から手ほどきを受け、村の教会や楽団でヴァイオリンを弾くようになります。礼拝の後や祝祭の日、父が営む宿屋兼居酒屋（肉屋に夜通し鳴り響いていた民謡や民俗舞踊は、未来の大作曲家の感受性形成に大きく関わったことでしょう。1866年、スメタナが国民歌劇場仮劇場オーケストラの指揮者に就任。若きドヴォルザークは、このオーケストラでヴィオラの首席奏者を務めており、スメタナのオペラ「売られた花嫁」初演という歴史的事件にも参加しました。この頃のドヴォルザークは、すでに2曲の交響曲を作曲していましたが、未だ初演されておらず、作曲家としてはまったく無名でした。

その後、多くの作品を誠実に書き進め、1891年ニューヨークのナショナル音楽院院長への就任のオファーを受けた頃には、作曲家としての名声は不動のものとなっていました。ドヴォルザークは、最初アメリカ行きを躊躇していましたが、それは長い期間に渡ってチェコを離れることへのためらいだったようです。1892年から95年までナショナル音楽院で作曲や管弦楽法の授業を受け持ち、合唱やオーケストラを指導し、自作を含む演奏会を指揮しました。音楽院には少数ながら黒人学生も含まれており、また黒人歌手が歌う黒人霊歌に強い関心を持って聴いたと言われます。ドヴォルザークの音楽は好意的な拍手に包まれ、決して居心地の悪い異郷ではなかったと思われますが、そのことを何よりも示しているのは、アメリカの地で、ドヴォルザーク生涯の傑作と呼んで差し支えのない3つの作品が生まれたことです。すなわち、交響曲第9番ホ短調「新世界から」、**《弦楽四重奏曲　第12番　ヘ長調「アメリカ」》**、チェロ協奏曲ロ短調です。たしかにドヴォルザークは黒人音楽に関心を持っていましたが、これらに黒人音楽の直接的な引用はなく、アメリカの水に足元を浸しつつ、故郷ボヘミアを想う個人的な心情が映されていると考えるべきでしょう。

（なお、作曲者の愛国心を尊重するならば、よりチェコ語の発音に近いドヴォルジャーク、もしくはドヴォジャークと記すのがふさわしいのですが、ここでは慣例に従ってドヴォルザークと表記しています。）

ボヘミアを生誕の地とするスメタナ、ドヴォルザークに対して、ヤナーチェクはモラヴィア北東部のフクヴァルディという村で生まれました。父は小学校教師で、貧しい環境ながら地域の教養人として頼りにされていたと言われます。ヤナーチェク自身も、モラヴィアの首都ブルノで教師になる資格を取りながら合唱指導者として活動し、プラハのオルガン学校でも学びました。プラハでは、スメタナの「ヴルタヴァ（モルダウ）」の初演を聴き、聴力を失っていた作曲家が熱狂的なカーテンコールを受ける姿に感銘を受け、またドヴォルザークと親交を結び、作品に助言を受けました。国境を超えて活動の場を広げていたスメタナやドヴォルザークと違い、ヤナーチェクは、短期間ライプツィヒやウィーンに滞在したものの、生涯の大半をブルノやフクヴァルディで暮らしました。

モラヴィア民俗音楽からの影響に加えて、モラヴィアことばのアクセントや音程を会話から聴き取って音楽に反映させる「発話旋律」短いフレーズを執拗なほど反復し、主旋律になったり背景になったりしながら音楽を推進させる手法など、ヤナーチェクの作風は大変独特で、手本となる作曲家も見当たらなければ後継者もいません。その本領は、「イェヌーファ」、「利口な女狐の物語」などのオペラにおいて発揮されています。また、チェコ人の権利をめぐってチェコ人とドイツ系市民が対立し、軍隊によって殺害されたチェコ人青年を悼んで作曲したピアノソナタ（1905年10月1日・街頭で）は、20世紀の作曲家によるアンガージュマン（社会参加）を先駆けています。

1917年以来、38歳年下の既婚女性カミラ・シュテスロヴァーにプラトニックな恋慕を抱き、ヤナーチェク自身も既婚者でしたが、最晩年まで600通もの「恋文」を送ります。この恋情は、ヤナーチェクの様々な作品に霊感と活力を与えましたが、とりわけ**《弦楽四重奏曲　第2番「内緒の手紙」》**は、副題どおり一個人の心情を込めた作品と言われています。文学であれば、まさに「私小説」と呼ばれるものでしょう。

公演のプログラムは、すべてチェコの作曲家によるものです。しかし、ドイツと接する西側のボヘミアと、スラヴ特有の色合いを持つ東側のモラヴィアでは、文化の在り様に大きな違いがあります。ほぼ半世紀の間に「私小説＝私音楽」の肌合いを持つ名作が3曲も生まれたのは偶然ではなく、ヨーロッパ文化の周縁地域、抑圧された政治状況、弦楽四重奏という楽器編成の親密性など、いくつかの必然が重なった結果であると考えられます。3つの作品の違いをお楽しみ頂けたら幸いです。

1824年　3月2日　ベドジフ・スメタナ生まれる。
1841年　9月8日　アントニーン・ドヴォルザーク生まれる。
1854年　7月3日　レオシュ・ヤナーチェク生まれる。
1866年　スメタナ、新国民劇場仮劇場オーケストラ音楽指揮者となる。このオーケストラのヴィオラ首席奏者はドヴォルザーク。

国民歌劇場仮劇場

1874年　スメタナ、健康状態が悪化し、聴力を失う。
1876年　スメタナ、弦楽四重奏曲第1番「わが生涯より」を作曲。
1878年　ドヴォルザーク、スラヴ舞曲第1集を作曲。
1879年　スメタナ、連作交響詩「わが祖国」完成。
1884年　5月12日　スメタナ死去。
1892年　ドヴォルザーク、ニューヨーク・ナショナル音楽院院長に就任（95年まで）。
1893年　ドヴォルザーク、交響曲第9番「新世界から」を、次いで弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」を作曲。
1903年　ヤナーチェク、オペラ「イェヌーファ」完成。
1904年　5月1日　ドヴォルザーク死去。
1928年　ヤナーチェク、弦楽四重奏曲第2番「内緒の手紙」を作曲。
8月12日　ヤナーチェク死去。

ベドジフ・スメタナ

アントニーン・ドヴォルザーク

レオシュ・ヤナーチェク

Bedřich Smetana
Antonín Dvořák
Leoš Janáček